私い文度の様子ありかたしまず、これい甚言葉きいやし、商人のようきまあ者るものしと評してあります。今菊池君の腕の力を以て鬼神を拉ぐるとも諸君おあるうれまずまい。係一菊池君の吉の力を以て日本人あ鬼神を怎ぐもる三十一人字を論ぜんとおもりて実に諸君我意外出ますまいろう。ぐ即ち商人のよき衣をきる所ぞ。これも要くいろ様ですが一方ぐ見ることでもありません。ただ商人たるもよき衣を着るのいたれぶけの働きのあるのです。即ちのきる所のえらいのです。第五賞の発言者を問りの物ですから。ぐ理由のない。係一其理由のない

でありません。君の演説い少のめく実に巧みしてもうもちろんき所のなります。ただぞ一人ぐつてあまれるかすー拙者の所ぬですが私い自分を大伴黒主ぐ思ふまいろう。君の言い出の初めく六歌仙の中で下なくつでありまして。芝紙屋ぐ言ふて方の歌を選ぶとふ位ですぐ思ふひどいですが下ぐ、私ぐ今晩、諸君の演説を選んでいる城ふ方べるとおもいます。係一全体ぐふとう歌仙ぐ論弾ぐなる事に違いありません。即ち諸君ぐい事実に於て必ず六歌仙と名を著しくする人ぐ出られるであります。

佐々木君の至誠の至極ぐなりて天下の耳目を傾

[illegible]多村君の[illegible]極的ふるの[illegible]を[illegible]の[illegible]池君いまゝ[illegible]
りでいとのんとして[illegible]みなのめまぐるしき事業を[illegible]れ[illegible]
[illegible]君のめまぐるしき学者であつて学理的の理学を研究し[illegible]
[illegible]に適せしめた[illegible]ていりの開化じんなに進むの[illegible]
ません考へてくださふるりますると私いは日本帝国第歳一[illegible]
[illegible]歳といそざるをゐません」とて壇をかり散会[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]師　竹村小鍛治
僧[illegible]　佐伯蛙池
小野小町　伊藤鉄山
[illegible]　新井[illegible]
文屋康秀　五百木陽居
大井[illegible]　河東奴可理

○能樂と演劇

今日所謂芸居なるものは能楽より従代来りしも
世人の称する所なるが能楽は昔代の英隆盛を極め

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

芝居は呈利の去年より葉を分て河川氏のもとにあり
うつされどなるべきもの能楽後世芝居となりうるに近世の
なりとの。其歴史的いさてをき、今日存立する所の能楽と
芝居とに就きて見るに其実能楽は貴族的にして
男の出すまに出すまに出すべん

第一 能楽と芝居の舞台と構造の別なることなり
花道い橋掛りより来り、芝居舞台の上手
の入り口い能舞台のくりぬきより来りしるべし

第二 芝居に能楽のかくを混せしをしるべ芝居の初
第三番目のものを多い其他勧進帳のもの

第三 謡曲と浄瑠璃との構造に於る所あり即ち謡曲に
地と詞の二種あるべく浄瑠璃も地と詞あり従て地
をかくるべき語り手あり。西洋の劇にい地なし
是れ近来い詞をきくとせり

第四 謡曲浄瑠璃共に文章を作ることし謡曲の旋回
多く一段ずつの変化あれば保一段文章多くい
大なるべきものあり浄瑠璃い初めのうちい文章を
主とし都合に従て長くせざりき。後で芝居の如き
設者のさなしふありとそみまにい注意せざりしか

第五　浄瑠璃の文章中に謡曲の文句多きを以て三番叟
勸進帳のごときいふまでもなく俗宴会（謡曲）
の文句をひきかるるものすくなからず
第六　能楽に笛、大つづみ、小鼓（タイコ）、大鼓の楽音を挿入するごとく
芝居にも三味線、柝、木、大鼓、鼓、鐘、鉦、鈴の音響を
まじゆ（こは西洋の芝居にもかくの如き多く
楽器を用ゆる法也より導びかれたるもの）
第七　能楽にていへば音楽者も地方も共に上下（カミシモ）を着て列ぶ
すべて芝居にても、時として地方、地方などは
裃をつけて並ぶを有り

第八　能楽に音曲なるものなるが、芝居にも時と
して中ごろに義太夫の女を坐はせ義太夫節の
浄瑠璃音楽ふつと調るを前なる所作多し立ち廻
りのごとき六方を踏むといふがごとき芸最なる者。西洋
の芝居にいまだかつて絶えてなきもの。ただ
西洋にもかくべく芸者の多を有けり。俳優多少の
調子を取るをいふ俗語西洋にきこえて中ごろ
いなるべし

第九　能楽に通じ、中国人、狂言をはさむ、芝居に中幕、
子ごの芸のごとくなるべし

第十、純粋と芝居と称呼を[redacted]する者多し、舞台、設者、はや方、地方、地、衣裳、衣裳方、楽屋、芝居多くは（古き浄瑠璃に用ひ来りしの語を用ひる者あり）

第十一 [redacted]

[redacted]（多くは）芝居の早がりと云ふ、純粋に於て[redacted]などの語あるを以て衣裳を加へるより統代表りしなん

右の区別と順序とは、[redacted]しある故に人許りでよ、又其[redacted]中、強曲なるも自然に発生すべきを有て、強出す事りしを云ふべきなるも、[redacted]のみきも強出ある以上、幾分のられより其思意を為る者なるを知ひなり故に保せてまつけうり

○寛ゝ、厳ゝ、中庸ゝ

常盤会寄宿舎には茶話会なるものありて毎月一回之を会内の役員に開き、監督の事務あり、其主意は演説の練習にあるを以て会員に順次演説せざるべからざることなりおれり

又内務省の監督となりしより一層の奮発

百五四

もありき。演説講義の場合に茶を吸ひ菓子を食ふ事、
二月のまつりは例会を用ひられ午後七時迄集る者
十餘人、内数時間来賓されしつゞき伊藤某氏壇
上り「世俗い金監佃氏が当後より大学を卒業されたる
寡に繁雑なるもし就きて法学を学ばれるが氏の金監と
してを功労ありしを称して共に惜む」との事を経
験に述べられ次に佃氏壇上り（勿論実際
壇なるもの）テーブルあるもの）て初めに「佃氏が野蛮百出の中
に立て学術を監せられしは実に感心なり氏い実に金監
より多くの後援非難を考へられ氏い弱て動かざりき

氏いこれとふ功績を賜はれるとあれども氏の功績なるを
金の業績なる所し」とふ言葉にて述べられ次に「佃氏い金を使ひた
嚴とふ言を以て言はれ」とふ言葉に表れ表とい善きを
あれば、さればとて実に失すれば因より不可なり我い共事者
を執りて」と思ふ、これい後の佃氏の主義をより批評
するのでいなく新金監に望む所し」との言葉にて結ばれ
ま。蓋し此六月にて金監の一年の任期満つるにより投票
改選せられに五名横山三氏最多数にて金監の任ぜ
られ五名氏おに佃氏と共に金監たり故に再
選し横山氏い五名の金監となるおの金監となるべきか

百五五

故新潟県あれば、佃氏徳田氏代つて壇上に立つ。「只今徳田氏に余の素性を説明せられたる通り、この余は飽くまで厳粛なる学者たらんとする主義を取る。余は寄宿舎を去れ人と思ひ、徳田氏の説いられたり。余は実に道徳を説くべきの人。其理論素朴なるを以て、故に余は当時の常識を離れて、極力なる寄宿舎に於ける生活を断ちたり。是れ余の素朴なる寄宿舎に於ける生活を断ちたり。是れ余の此寄宿舎に一点の不満を感じて生活を為すに所以なり。余は此寄宿舎に一点の不満を感じて生活を為すに所以なり。余は実に道徳を説くべきの人なり。果して此寄宿舎に於ける生活を為すべきの人

一三五せんなんとのある。お金監佃君いとやかたを辛へて物ゐ氏寄宿金を出すれんとします。私い俗くまで氏の切績を称賛する積りでゝゝゝの已ゐ伊藤佃君の川相談ありまゝゝゝゝれゐついたゐ論りいます。ゐ氏ゐ金監となつての後切いこれとゐをいゐいと佃君の川法でゝゝゝの、私い其切績い現氏としておると思ひます、即ち氏寄宿金ゐなるの者様でおるゐゐ家の切績ゐ表達あります。他ゐたれも物ゐゐ氏い不人望であつゐゐ、これゐ上ゐ立つ者孤み創業者にい免ゐゐゐゐ租税です。佃君い寄宿金ゐい人ゐゐゐゐすゐゐゐゐゐのないとそれゐゐ。それいとゐゐゐゐ人を馬鹿ゐゐゐゐゐなとでですゐ、これゐ佃君ゐ熟江に寄宿金を出せれゐの俗り失望して此話を吐かれゐゐのゐと思ひます。私い佃君ゐ熟江に寄宿金の為に尽されゐゐとゐをい信じて疑ひません。それゐゐ寛義の議論がでまゐゐゐ、中庸とゐものよりもまをいゐゐゐゐゐ

標準を立てるとなると中間というものを標準にせんならまと思われます。今寛を標準に立てると放蕩自恣に流れるの弊があります。又嚴を標準に立てると却て意氣に乏しく卑屈になるの弊害があります。但君が寄宿舎を整理するに素よりなんとかそれに接着しようとそれぞれ、それに接着しようと考へられます。彼の酷に陥りを防ぐに先ず卑屈なるを知られません。」と話されました。心理学の講義にあります。情緒とは感情の中の情緒のつまり極て大体の話しを申し初めに感情の表出(Expression of feeling)を説き次に感情の発達を

説き次に外部の適應(Accommodation & Surrounding)を説き来に「人を言ひ表わすのに素朴なるしかも先ず外部の適應をなしも者であつて苦痛を感ずるを少くするものです。昔スパルタで兵を養ふに難りせしあらせ見けであります」と述べ再び情緒の三区分(主我、主他及びセンチメント)に移り主他主義より同感(忘レシ)と云ふ主我主義より発する情緒であつて高なる感情の基となるものであります。同感の一種に Contagious Feeling とゆうのがありて他へ影響をなしてゆく所に一種の力の多い皆立ちます。

百五八

多くの方へて「敵の来るのを待つのみ、われ攻めずんばなるまじ」と思ふのでいあります。まづ此一点が主つのです、又これと似寄るもの人間もありまして、知らず〳〵人の真似をするものであります。小供の頃や婢などの言語動作をまねますが、これも此あのまねをしてゐるのであります。又年をとつてからでも現に先生などの言語所作を不知不識の間にまねるものです。即ち自己の為して居る人の言語動作いろ〳〵自分でまねてゐます之を自動的模倣（Automatic imitation）といふのである。人の年をとるに従ひ道徳を修養し善悪を知るのい事もに比自動的模倣が重用するとふです。若ふ良悪の下に弱年なりとふものがありまして、多くの年をみつそなるとどうしても世まねをするふ兵隊まで多くなるのでしよう。一人の英雄の出ると沒山の英雄の出る、富家の三河吹聴と沒山の富家の三河吹聴とは同じ事でしよう。又それのそばなる年とりて見識のある者い人を多数すると知らず知らずの間に模倣するものです。それゆえに宵宿舎を整理するも世上に立つ人の一金監前論、其他の年長諸君を含んでゐます。我身を修めて他人の模範となる様世ねばなりますまいぞ。

百五九

さへまれば出来いどうせいそう治まつていくと思ひます。」と話じて壇を下りしが内務省情いまら壇に上りて特に寄席の仮契と注意を与へ終りて傍聞をなすべたりしが「私は其主義に寛容中庸ゾれ申して只だ其の使命さへ守られふばよろしきのである」と壇を下れば五番氏に代りて生で「私は今迄金監金計のる許りを写るもので、諸君ゾいそを得なもつ」のものぶいと今日始めて知りました」と言ひ終りて「はい皆さんぞ必を傳ふ」られます。暫ありて五番氏壇を下れば終て茶菓を喫し「伊藤は余に向ひ「君の話は自動的模倣と小児は

はれる青年みるべきものにあらずして人生の奇事なりて小説を読まずにあるも他の書と小説を語じるのみ」と言ふ。余答へて「されば小児でも青年でも自動的模倣は同じ事なれども其人なる所の者は青年なるの人を見るのみ、故に余は青年の実力を見ずして結きを知るとなすべし。余の主義は方法を問はれば余は迂生主義方法を知ると答へ人の「と言ふ。

附ては薩人など国法を立て、其勢力を以て世常に教授なる者を生ず故人或は其外国を見て之を模倣せんとまれども知らんで知らん、薩人は之を者

百六十

板の家庭のと思ふあらば、なでて長者を望む部するの意
隠き加世者のりを終ずく接俗するのと
多し部下が世大名が部注せざるに大名の部下を扱ふと
意強なるい部下は必ず怨恨又い抵抗をなすべし又それ
様いず威力を以て部下を壓しなど部下い巷と事力に
巷と卑屈みなるを称なるべし

○お百度参り　廿九及び三十
余年東の切、大谷氏より参りたる書状ふ先月大阪ふ立ちよれと
勧めるるまに

○お百度参り　廿九及び三十

余は東の方大谷氏より参りたるまゐふ[illegible]

[illegible]

[illegible]の家庭のと思ふ[illegible]あいだ、なで長者を祭するの意

おるなり世に「ちやくりんの祝」あり世人松山より出せり才世九の写し

えい「なすてさんの」とふ利事地方の「なすて」とハ津山地方の方言にして何故の意なり

[illegible]

狂歌の四首

ナルタイ俗の[illegible]口に知らたやすく利益仕て（男）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百六二

一体ふねちつくとをもし
知ずや君ふい我をかん　山

拙作へさ海
浪花のぜんちや
百おなじ沢沢三千を百氏ふ書下

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18
ガラス使用

来月の例じゃの「尾葉 稲葉 酢具 雪 外」おばあ様ねじすぐ●ゆきます」とふ
をなんの義ーーー

の花、南ヲ机下ニ呈セントス独セシモノ鍛錬ヲ欠クヲ以テ今正ニ
推敲ノ中ヨリ敢テ閲覧ニ供スト云ヒキ唯嚴等ヲ加ヘ
テ新ルノミ

伊予郡伊陽村　市神一左

（墨）岩主礎屋場松兄是亦

前刊庫秋慶篇司　國君耕耨寄常規
日色多暮風吹樹　雨未遠時水滿陂
隆福與用鄉餘酒　十年歌唱太田詩
人生到處老十年　邊外水涯

○医者兼文学者

医者兼文学者をもてなしたるに、その五番氏より手紙来る。おのおの第三印氏、伊与の国つ山城山のかつらの陰ゆかしき人類なり

東京　鶴亭主人

とあり中に

暑さ厳しいと云ふ程でもなく、雨降りもなく、雨いらんと思ひきりしに、子れみてあひしてつくづくと思ひ、世の夢の俗世陸すると

の[illegible]

世三年　春　十九日千俵の印[illegible]

[illegible]）狀臺の[illegible]赤い[illegible]細密画法國の道後泥[illegible]埠の大の[illegible]細する[illegible]

なる日様の[illegible]

[illegible]

[illegible]

子張の四隅降りまつた四の出る紙に書へられし
ちわり古雅で完成されたるすし僕まづ
ふもの空しく　とり　なるまものや富なれば
すぶ居なりす
次第に　く　印とやふ色の白の紙に改めば
ますよへン僕はいつてさうしたみの方なれば上人第五
為恒とでもやうやそれはく道の四のおり
出師第五中　そ　旨も内心とちけん計りそれ紙図書報
の京心時間の道切とり性てかづ出もまづ推印して
いとづ八条をなとのあ故当時　ものあるそしてみて

大暑晩成先づおちつかりをうふみとその黒いちりに続れ
ばとやう完全な出来上でし　そ
毎く偶四人脇浦と出呼い色の黒きうやの長て法衣
あどまる的いるなどい褐色のる僕を一相と人の我もやーに
て十九世る所四色その洋装に三千餘年の大花火吉
あてしより白しげ近さん形まで水の
流い一寸見えるそうそ
男ボールハ当るし拘ふず生こ剛のねどばのり勇ま
く
僕生涯白のズボンとタを穿ち法衣を著込み白足袋を
百六七

駄洒落識ヲシテ終ニ勲八等トナル可シ

たゞ大に怪しまるゝを為ふ金平ふくろう
さんなぶ、字のあるを探して下さい之
　　
　　
　　

「デンデンヤーッデンデン」何の何しろ
何とやら「きのふくつてし餓鬼道におちいかるる
畜生道心なで道いとでのりでい知れうず
見物大喝采

音羽屋ア　成田屋ア

○大晩成とふことの解いまいとる意味なるとい
る説的ふ俗信んでいる晩成れ
毒いたがぎし晩成い「晩ゼット」の男達即ち
たがぎ知れい晩ゼットとふ意こ仲間ちがべー

○茶褐色の肉襦袢、毛の法衣、……テモマーキ村の
つよん

○何内花火い三河花火のまちづ……オット穴探い
禁物ゝ

○風俗壊敗高砂香りー

○地蔵の茶碗のより実に世金監で（ちゃれとい
ねべー）

常盤會寄宿舎ゝ騒兼後、近衛歩兵
熱無等兼紅葉会書記官兼常盤
ベースボール会幹事兼正岡家御

百六九

留守居兼後〻扶桑病院長
五百木良三殿
無位無官大夫
河野常規

○松山の落葉風（カゼ）

松山より左の通知を左の新聞紙に掲げたるなり

[illegible]

此勅旨の趣旨を能く体し[illegible]年に寄宿舎中の諸友互に相志を誓ひ、[illegible]の[illegible]に[illegible]由を[illegible]て[illegible]に[illegible]一人[illegible]只一の望を[illegible]べきは[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]を[illegible]に[illegible]を[illegible]を[illegible]を

世間にしてしかく地主のぬきい僕伴ふ友者せり）余が
実の天皇陛下の面前に漂ふの感あり只感うた一点
の空火、地平線上に消滅するを見るのみ唱

○天爵論の[redacted]大失敗

余「人爵と天爵」とふ表題を以て「第仕せ」第二編中に
喋々と説き来り（ほぼ為ふべき）得意絶頂
清女の如く南瓜先生之を讃嘆し激賞を為すと様
「奇い別ち奇なり（ぬいべちぬ）只惜むらくは、一を知て
未だ二を知らず少しく怪つて未だ大に怪ふざるのみなり

何ぞ世人爵を捨て而して牧天爵を
求めざるの甚だしきに至るや世俗の軽視する能ざるものし
天爵果して何の用をなすや」と余に尋ぬるのみ
彼に一法を授する能ざりき。又明治子、曰く「子現に天爵論を著し大に人爵を卑しむ知
ず其之を著す所以の底意を探れば[redacted]牧自少人爵
に憧憬たる所あるのみ」と余之を問て忙然自失、暫時して
曰く嗚呼然るに以為へらく、乃ち葡萄酒
の瓶をなでき頭を振て曰く
借金で人爵買ふて別品他

酌（シャク）でおさあん胸の癇癪

[illegible]

○鬼の目に涙　文學者は淫陽

[illegible]

生殺りあるべし）其上何の国男の女の業りの生活い場所の
服のよろしくなく方で強もいでき不といつて拙者が様子
衣を御軍政の極試験でまあ〳〵ともかい解釈つき
信じ者の生徒（とゝ申なる言葉の言のるやられみも
つて始めて生うえなるものを知ものを実法形式の大
奮発お勉強まで（呉服屋の引れ不あるべ）平生時蓄
せるポテンシヤル、エナージーを化学的併用してカイまちり小変ど
其日上旬にい豊屋の男を好ものしてやんちい行ちに行
ちる甲斐なくある曲やや天者天を吸ことそうなるる
大なるものにあらずい男といふ一体で男性ふも二賢を以て

吉益家を相折せり特くしへ国の為の大きくしへ天下
の為の実に情むべきる共あり偶生まが服飾の為め
業屋九百ふりて小生ふ面会をもおの目を好ものを
なく眼を寒ものもの陰命い生来学い深もふ
世兵い為んすべしさ
（男）貴方のめく山川を為第オさ生なる位なる為学生者人れ
いくらでもある第一業屋拙い為第志新生ぶふ男人
と為つてやれい美しのに人ひとでの人男の不如意で不為
以外さ
古時の利益今知ると思男のく小生拙い解一般屋
百七四

一説、世四郎の中、松谷三郎の脇(脇)書様にて書に
為つる由、遠方の所の真蓮坊、言語つくされ、まに
ちぶ書様も先境の通せざれば、世極にたるぶ、芝屋
と書様のまた陸るより〜世空この工夫を用ゆ
べし

為て雨の降りてえみり富士の山とふ白を自慢
〜ぶ借ぶそれ富士をうて不国口を衝て出し名吟さ
そもそも及斯様なる事の降るよ書るの所なれも
お望の向柄なる柄使さぶ〜世名高く
雨ふ笠のぬぐる富士の山

和ぶぶ出と俗ぶ所うぶの名吟を深りみ人山雪
〜て様を陸手の出れあり法て他言すぶぶみく
ぶぬ陸手かたき込むぶらぶ空貫

子規病床下

滝石

書屋の自分附書ぶみ白氏より書
雨降眼病発角あるうぶ世ぶ書簡世沢を書塔
故柳の書様にそきるのを美しうね不ぶるぶ
枕の前にて毒書の関黒研と俗とあるまに海
まぶ池端に美るを世ぶ服の上に格の木はぶぶとを
百七五

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花束閉じ松の根元にある四角張る土地に花の種を蒔
かせ一面にうつくしく一時咲きこぼれ鶯づつみ花
地獄の面目なり病弱の美人の壮士の腕に縋りつ
めしかぐ話すべきの所こそ〻〻孝平の熱い涙に伝ひて
あとを追ふ
涙に伝ひなく浮世の泡になりどう考へても考へても
ものでくしたちはとずきりとして自殺する勇気なき
矢張り人間らしき所ある幾分かうある所なんの「乃安上」が
自分あ業を調べ合ひ口の地までかちかちまで逆十字
みるえんぶとふ「ゲーテ」の伝を思ひ出して自分は実の義

小生は近頃の事面白苦労して生長すること出来ぬ
くの事なる災難を合ふて南船北馬の間に命を送り
ちなく過ぎ行く年おより自然の富に強を焦一号
富貴の為に男子の為に為に
決闘を試みられいくのん条に月日を送り
生涯を使きてあるれの為に
りなぐ空華平年の極致をまぐ生涯を過ごすまず
院ふ見詰きみ出 貴方のもの
あ年如とあてどられ
しくてなるるとあと考へて
百七七

こゝに life は a point between two infinities とあるこゝろあるべきなれども仕方なし

We are such stuff
As dreams are made of; and our little life
Is rounded by a sleep.

上に位するこゝろ、疾くに存じて居ります生命の時なり死後時なり生命の部位に勢なりとも、たゞ其様に成ぜられるこゝの情なり、紛れまれ知る人何方より来て何方へ行くこゝのこゝるみたまふ仏の宿願の為に心を悩ます、目を悦ばしむるものの情のこゝ記憶すれど情の実に無方なり、生命とは正体なれども如何の五尺の身に整理する所と考へ難し、

肉体の五尺陽もや骨骼の中に存在するものと考へられ、ぶんぶんと飛び去れず只領悟の情情にて甘露法雨注ぐ事なく碧海の波隔りて何の彼岸に達すべきもなられずとみえん、

日に月に新なれど再び帰れず
みなれよ西仏に仏ましまれり
りんを知かれて

I can fly or I can run,
Quickly to the green earth's end,
Where the bowed welkin slow doth bend;

And from thence can man as soon
To the corners of the moon.

事は様な事柴なれども、あの西鶴さえ
なれば、さぞ根も葉もない笑を笑ひ、全実の袋貯
みを探んで嵐を集め、上を向つても脇を指すと様
に笑はれるでいけぬのの内又掌のみ白でいなれど二つ
の目が冥ぢ一つの息が絶るとき、其陰なく
父なく母なく兄弟も相知る義親もそのまゝ赤い滅
茶くさそこの宝とこの宝と、みおもてくもを示した
なぶんない様を無べば第一体すると自量教の

先へ引きとる時ふい誤の夏目漱石の手紙を知る
人や世界
(思ひ出)
小説家様な思想家ぽい成長にあげる事な
る世迷言やすい是ぞ(はきり)苦い顔茶と落み
絵へ
子規れい
漱石

自十五年の夏の頃の思ひ出を語ることなのあり
何ごと女の生りで眼ごの見るくなることと笑い声アゲルファ氏
氏は知まそでいのぼせこつよくてお義の事ぶわ(といふ)ぶる
ぶる素汗の時義白稲色男いさそ〳〵歯卯と
百七九

保こ眼病位ですることなり、まず題で幅を廻りぬきのちん
しゃくく。僕寿の眼を先学て之をトするに此しゃ
易の面、ちゃくちゃくしうしゃ六三、眇能視、跛能履、履虎
尾、咥人凶とかり眇いるとあるの者り方跛いるあるの者
おし能履ることを者も眇者ゴ物を刺ゴ盲者ゴ瞽を評
するよりしてと人でもかきるを違ひの報をちゃ。し
れを今寿の身のうたあてまずたに君生況六工此六三
を象爻り眼疾を按病とい爻の指りまりの極、終に篇
ごの三爻爻を三爻二相此義人と思ひ其報を知
でひするをきき大不服で歯をもぎ出かみくく様に

怒鳴りちゃくくとい面し中角ん。僕い後目遠目
といふ法の上に一項を加へく後目遠目病を目となんと
す字あて西焼米とあり保と病を目いけり目みい低な
の近眼ゴて血膜実い粹病の能面お水ず
能線いの臭ゴ書線い盗人と相撲れきまなるとの代
爻爻辞ゴ夢ゴ夢中の義人を画ゴ
牡丹保ゴ牡丹のすいものとい知ゴ之を示むい者る
色男の実ゴ上ゴ者の故ゴ義人を夢ゴ
の新面い寿の書面ゴ者ゴ者ゴ者ゴ者ゴ
ものゴ者ゴ我不復梦見周公とゴ之を考察を

百八十

歎きうり。角ゐい周子とふ者ありけるが美人にして
れ者ちてうり。妻人みめとぞれの男ばかりの男ひ特の枕
神に祭祭と共寄を拵せしの今いたしひさぶぼして枕
先今く泣き。ばに夢うぶに子と物りごちのいるを。
俳。孔子の教明者の男男とまぶ方くとものあにまて
ある窈窕淑女寤寐求之といどうぶさまの君と
脂粉と風俗をついうう償すまえで曰く
物木い雕すやうばサ
自仙の西門の白を名吟といあ。三の様ふ量見

僕の西門の白を名吟といあ。三の様ふ量見

僕の西門の白を名吟

白の中の俳諧をふ

俗り見識の大なるる者の咽喉へ入ることあないと

ものきりとそねもなく

二月の中の戦いかつて多つておきいと、あて服

知いさんなる人を多化するや物のあいれられるで

紛りのあぶまとはいとの。男の見に涙といふ時

りもなりりりりとあん

又と華厳黒紬の着き生で

an little life
surrounded by a circle.

の書きおろあ寂に晩郷の村長場うるのおまけ地場
苔の平、時上の松葉拍ふりきるまい夢義人の為
ちとそえて宮ーの叶ば此の諸もべー
特西崇冊は時つづきそえて特男の生まれ上りの妹
を思うて西国の宝みる。士とざると言る、幼見すべー
その七男の書きそえ御俗俗是なるとかるめー
芸の平る歩で日ー油断い大敵よりも猛ー

めざまし 弱ごまるや時時一変
七の毎朝いの母なん義人を夢うるのなるべうす
あ千ず
弱ごの母や夢の義人用情を寂
夕顔の花振しとひいぶされて我敬なるなるう
蒲の「茅中」これまで我友なるべ」とひんい
まず恨ふずとの
あきの母や顔ふ居ん童乳借乳
と口ずとうるい世角よりいそで世角よりも書ーて
山ぶ

「我は何となく陸世のいわでの。。。

ちあきらの兄よりも人目の暑熱に一時代の最新に驚
の暑熱に同じく南極界の一点にうまれ一つの
長いとふ狭い暑気に経験したことのない感。
と君。
僕毎年の夏休ふ所業の古里を抱く故にうだる日が星
ふずして十分の一も出来ないでて年
古里をすてて只一年のおそるべきとんひ者多
ふ所にはうまりしの何の相世一年のもぶ書きさ
ぶるをつけるを(ふずのさ)ば何して日をすごす
書籍と活結で焼香オツト情夫するの外なしと

用事のないものしのヤ(傍ら)のお宮ぶとの向ふは事
ぶとの、ふい恐縮、あすは運動会。古きそのもと
へ向ひ出る(つうぶ)田舎の旧友を訪ねるつうぶ。
今の課記、俳社の年鑑をいふまでもなく東京の友人
見物を書くのさるつうぶ。さてかこの年人より
おくばかりに遠くの色を断る事もいうず。それがう
るさいのうすい色を黒くそうと思ふ位に出来注へ
出のけるのどそれやこれやで遠急なく白馬いのみ
ゆくと年の夏も行、天我ふ切必をうるとをねめ
り(君の調を伺る)必保俗をおちすて世在ゆに

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

In poetry, where every word is free, every word is necessary. Good poetry could not have been otherwise written than it is. The first time you hear it, it sounds rather as if copied out of some invisible tablet in the Eternal mind, than as if arbitrarily composed by the poet. The feeling of all great poets has accorded with this. They found the verse, not made it. The Muse brought it to them.

三千人は自然として出離を願ふ心深く
温泉数厚而不思則深於詩者也と、温泉設備の
もつとも多きを謂へども能く我身の所
用を顧みれば一点の汗垢なきを如何せん
しかりてのみならず仏法あるを知らず、つまり
ぬけ道事ばかりを願ふ為なるのみ、生涯
の人は免るべからざるもの、我身の中にあるべ
きを知らざるなり、我身の中にあるべ
き仏法清浄なるものなれば、我身にて
開山道元の申給へばあり我身、業にたらんと
おもふて十方世界のほとけに住すべき我心清浄と

なるべし、これ即ち法神が不染の身に与へる所の仏性し
因果そなはるにあらず、身をやぶるとあらば、後のさきに為ち
その後にはなるまじきあらん、仏僧を借りて
若以色見我　以音声求我
是人行邪道　不能見如来
是れ即ち悟りの域、悟道境中、豈二神あらんや、
あるべからざるものなり、煩悩なく、菩提
もなく、無色明亦無色明、豊乃至無老死亦無老死
盡とする而てみるべし、無老死亦無老死
亦無の如き者が如来、我と為みて如来と我と為る
百八

所なきまゝ相応寺と云怪物実仏菩薩にして衣仏あり
虚仏なるがゆゑに人ゝ為りて為様を見る情見る人ゝ
為りて性の位置を強ふするのみ一仏菩薩なれば仏あり
光明なれば天魔あり善しと悪しと
善ゝまなれば鬼しかして詩人なれば詩神となる。
此陸海軍人号外の活思を
為る世為る所の詩人必ず詩神として存在する心是こ
れを詩人なるまゝ陸海軍人の為りて世為る活思を
吐露する能に世活い天地の為めに地陸海軍の為
に為たる詩人いまゞ生境遇を為す所以第一

まゝ〳〵書きまゝ書きまゝなる世活を活ふまゝり
世為活思何者の為めに〳〵世間に出でゝ世界を
吟ずるのみ一実に我と樂率天より見れば御覧
せよ浮世の業の上たる飛ぶ蜻蛉の如き
うん……とうまで悟りさとる我に一さの光
陰を加ふ天道様にそうめられ
ぬるぬるや和尚さまに見せさせ
ゝの長話議さぞ有りがゝ藤岡ゝ有ること
を不一

陳石雄拝

何なるのこと（裏）

○大學者の喧嘩

自まつり何の附名大人すり自誇者

きすぐの話神に寄り添れたりと威張られる以上の係合なり
後に来て何事の何ものの如くなれば天晴れ〳〵うまれ
〳〵と自を指て威じ一人の形也一時に話神の代りよ要
変来嘆入られたりと思ふ様な要口行り君は氏大変得を
かつぎ出す事ゞあるまたあるいは僕一得をたなる事すべ
あ最後なり〳〵此得を喝（決要変を後ひの）

百九七

我黄所造諸悪業　皆由無始貪瞋癡
性多語意之所生　一切我今皆懺悔

如来の教誡書様の如く尚奇妙なる霊境を語りて悪口とかり　おどけの旨を掲げて冷笑となりて西白うるべき其様の日蓮の癡を傳るうるべき言いれい深く仕様道徳の業者の出方の相の嘆語みなる狂人他大言を喜面目小攻撃して以ていなる(悪)

諸神は仏かり　仏は諸神なりと小議論斬新なりて面白君能く色彩のみ遊んで情降を偏のみ住し自己の境界を写し出すとすれば如何なるか

今ます朋友の交を絶ち師弟の礼を捨て贈を執り君の心を遊ばんのみ　例の聴則的掃蕩的の議論から一切衆生を(惑れ君)ちんとも嘲つて貶ぶ(孤禅生虚)扨おつるの中のたつて色功とあきらむべし又理屈詰め雪隠詰めの情論から出方も大分言いきりて対しきも是は法山あれども出の天象会しい色角よりしうべ攫み合の如紅会に果て法閑でもなれば様なるとどちらが怪なるしても西西弟子の勇人を結縁でもるとは大事ぞうう一先づこい中喜りて置きますよう何先月上旬にい諸神にのりうれとは新色をみぐとおもう

百九八

君が為に僕もまた一言を吟ずべし

（ふ）

江山客不俗懷塵。君是功名場裏人。憐我病軀多
宿気。漫將翰墨論詩神。
君の説詩を聞くに浮世を先ず厭ふ如き様子あり
筆墨の書画に活――又書画――て詩人たるの夢を
仙人塵俗界。逐不免喜悲。啼血又吐血。憔悴憐君
姿。懶石又枕石。固陋歡吾癡。君病猶可癒。僕癡不
可医。素懷定沈鬱。慷慨如徐。活歌時幾曲。

一曲嗚壺碎。二曲双涙垂。曲闋呼吸之。衆
情欲訴誰。白雲蓬勃起。天際眉蛟螭。笑指函山頂。
去臥葦湖湄。歳月固悠久。宇宙獨無涯。蜉蝣飛秋
上。大鵬嗤其卑。嗤者亦泯滅。得喪皆一時。寄語功
名客。汝之欲何為
君に茶陌で話したりした様に花なくして
出来る古来ひまなる世間の人の辛苦を思ふ
刪し修飾にも所詮つぐなぶは位卑下なる者の
君がよしや大の男の離まうちいかれまい）
雲地白牛

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ：第1-4編』請求記号 WB12-18
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

（白雲皎月）

次韻

琵湖携筆遊紅塵山紫水明憶美人一夜天風吹我去

[illegible]遇詩神

小生居を三井寺下に卜す山光水色仰ぐに攬りハ景七

[illegible]皆筆頭に浮ぶ知る可し西嶺暮雨湖の景毎日

無量の雲烟を君の胸襟に吹き送れ山あ

り水あり関所あり南地何れか[illegible]

[illegible]

三伏得南遊。一事無能為。携筆独歎息。雄飛未得

時。只餘意気豪。海涯又山界。負笈再出家。飄然游

天涯。東来一百里。小涌琵琶湖。水光如明鏡。山勢

似蒼螭。式部不復出。継筆知是誰。桃書臨写逝。芳

名竹帛無。今世詩蕉池。不絶僅如線。文章皆有病。

甚奈無良医。吾不与世移。遯塵独守廉。半夜停筆

見。彷彿美人姿。眉端月明出。耳邊天籟悲

[illegible]

ごうど

一寸時間をやすんで月見ごろ幸ひへのきくり
は
沒ふる男の
くらけていあ一あんや月の新
むすかるはいひとりとまもれの月
月や明[redacted]の中に水一の
迎送新派
俗事要一品を寸きをいたゞきとれまれまい
俳句雅詠

蓼庵道人

いくかの城のとのゝ又世のつい家とみて天神の画像掛をうけて祭る家多し――。されど年の女はみくるぶんだん少しく意ごろ
ゆ

○古事新解

「世に素盲けてまいりまーらるで何ゝ多つてゆきまーぐ苦
――い幽霊――と云て物ゝふいるぐらゝ上のてすぐ今ごや幽霊い
ないのぐとゆーーますなゝれいお医者様の方で神経病とのゝて
ナーこ幽霊が出るのぐやなれ気のせんで居るそまぐとしいますな」
なぐい近来為後家の女ん寄りが多く拵て古まとい女房を云い
ず貞儀なること多――。されどもるよりゝれいぐそ、何の弱虫、

ばれいこれの譬なるべし扨また予一日本の神代紀を繙読する人の曰く言語のあとかたなんとかいふ事を探るといふを潛ぶ事を、おのづから解ぶべきといふのごとく（おのづから解ぶ陸奥あり）いまの大蛇といふ人の賊なり其の剣の刃こぼれなどといふ賊と斬り合ひしあとと土蜘蛛新猪名あるべし土中の穴居せる盗賊なるべし。

○ある雪ぶき浪華をゆきかよふ山川信夫卿曰く中野村に穴ぶなどといふのいと便なることあるべし其のより考へられまつる宮柄のうりみおなしと岸沢曰く岸沢の流の四傳なるといふおなじ様なれば或いは流の四傳なるべし

其に岸酸泉なる人の陶きんでみいあるべきものとも言ひぬべきに其実ぶーきものと思ふべきに耶須堂の松生れい砒霜の如まりものに知ぶ鰭振山の生ぶ石に佐用媛の化形ぶるべきにうーとそもそもくのみ

○詩文可否地標準

著一行人ぶの詩を例りて其中ぶ言ひそこなひ其風雅なるを言ひ言ひ詩ぶなるべし詩の四品ぶ言味を深山金あて詩ぶべきものしと其人之を字きて宮ぶ例り詩ぶ

一詩を例り得ぶ新ぶ其中ぶ言ひそこなひ風吹ぶ

猫懸、油貴菓舗喜ぶの例りぶ其中ぶ言ひ新ぶ例ぶ何の

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

きたりやと云ふ世人答へて曰く風吹きて砂を飛ばし砂眼に入る是の故なり世人(法計の者)云く三味線を買ふ故なり三味線の胴に猫の皮を用ひて張る故に三味線の音となり猫の泣き声又油の價高きが故なり世人云へり早く帰る早く帰る時どうしてそれ程に高くなるとみなる、高からんと欲するを買ふが為にして自然と薬屋の店びとなるとなり(これ)とそ。こい一味の変化論ふるに(余なほ明らかの者物の道解をなるべき為なき能はず例へば論語のごとき孔子が世法を発するに因りさまで深き意味なんあるべきにあらずしかれども(それ)おのおの(後人)が之を註釈するに

みをそい共意味を演繹し推究し蛇足を添へ光輝を増すと一方なれば(おの)ふ孔子の思ふ所を知りて後生の畏るべきことを(これ)ぶ孔子の解釈(とし何と)孔子の面目を変人(とし性)の面目を造出する人なりしなるべしかれど論語なる言のごとき所謂一時の変化なりと例書の舊説なれまるべきあるべし所謂の変人の所なりしと例書の舊説なれど孔子の名言なりとすれば論語をすべて子供の説を中心可し之れ実の為を知れり可し之論に異意見をしてしたるに至ざるべし余の敬師ルドック氏小聖人に皆書を著さず而世人(の為)を知恵して書をなす者必ず世異なるし例へば希臘のリノニテスのごとき書を著さずして世人(プラトー、アリストートんのあ

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

きは大著作の部類に属して世界的の書となりたるのみ
なれども世に示されたる所のものと余輩は信ずる所なり
以て孔子の■力を盡したる書なりと為すべきものと謂ふべし
世界的の思想家にして世界を指導する者は必ず偉人
なり――明治の遠方より来たりて我が国の現を
手ぶりかたちうれしく――（明治の御代は早くして後のかの
の徳を慕ふてきたりものとすれば世界の思想家
情ふんのが為るごとく世を信ぜんが為めに
言ふことは人間なれど我が国の国家と時の一家を
ばれるの道は世界のごとくの。信じもつて成るべき

学者が為の余い信の重のうえむつて信の級をうけ
孔と名ふ信仰をのまく為のように。
学ぶ程度の上より孔子より孟子の方が強発者
孟子より程朱の方がまさりなり
生ずる知れない因より四世の弟子なり
孔子は孟の風をもつて人はどまるのいこれ宗教の為
る所しかの学者は孟の早くより成つて本
ものなり。本の書物は本より終
金陵の佐藤七郎集大鏡を拾てこを見る。生者の中に七郎集
を求めぬるが為に芭蕉の句のまにまにて二十七■二十七
二百八

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なる薩まるべしと解し好の二様もこの様もあるべし一富士の
ゐる好を指ゞ一風吹て梅花もとくば風の吹けば寒しの
ゐ梅が花もと解するより然れば想像すべし能く人を化
（元吳なる）解は為る範囲内にて尤高慢の深きを知と
する）

○ろくさい

三井寺観音堂前井筒屋六寒兵衛
（ろくさいの名人あり）祝言の時に太鼓の音かつ高く響
ゆるふる事の来りて「そろくさいの時なり」ましてそ
きやうれ」とおろくさいといふもを呼べいこの年一な打りな

ちう絃法（ロウテ）
とふ歌はあ
りしかろく
あるとも意
れと関係
あるの自注

元禄年刊本
能諸演和に
六林八郎の
あるる弥
陀ちう集加
とあり
明治廿年自注

弾する心とゆゆしきことなれと出でたる祝言やあ中にて十人段
りよりつゞく大鼓紅をどり〳〵と唱ふすなりろう る俗謂なり
りて廿まるべ拍をつゞけろく廿人歌曲によりて多少ありれど多
ましナ人ナまし二人なり廿人皆おなる性様なりちなんとゞお
新戸富物を知れんろう廿年ハ「ろくさい」ふあゝで十二三歳より
三年間解おる廿おを九多〳〵ます衣服ハ一定せず皆通常
の色絶の浴衣なり中ふ二ツと西洋ろんどゝをあて三尺ゞ
あるもなりろう或ハ拭を頬かぶりとなるゞ不体裁極まれり
楽器ハ鉦と太鼓の二ツなり（図次ニあり）鉦ハ直径八寸位なり
之を木の皮おのみて打ツし二ツなゞておつ吹ハ丫の字

鉦

大拍子

器を以て大拍子四の直径九寸位にして其長さとの比例は上図のごとし而して其横の●図のごとき木の柄をつけ歩人は此柄の一端をおちなどもたれを用ゆれども時として拍子の拍は面書の太拍を用ゆれども時として細長き鉦（次第のごとき）を用ゆることあり鉦を打つ者は人にあらざるべからず大拍子を打つ者は人にあらざるべからず

しかるに拍子踊るし踊るに拍子は必ずしも踊るし其様は定まれるものにあらざるべからず世俗の大人なる者をもって打

ち、ちぶなくこちらげるのうえ一曲の終なく一定の節奏なるべし其間の曲は随時多少の変化あり一曲毎に変化なきものは変化なきものも亦一律と出す

しかるに鉦は鉦の音を以て「カンチ、。チ、チ、チ、チ、チン」或は「カン〳〵チ、チ、カチ、チ」とあるべき者を繰り返す（こと）

ごとく大拍子は打つ者は●これを合せて足拍子を加ることあり

ばい大拍子を打ちばい打つべき所にて少しの面白味を生ずること

実にばかげきっているものなれども十歳前後の子供にはよく

面白がるべし——此のべき曲を奏するを十歳前後の者に

教ゆる猶なるの為なり。これを以て鉦一の所作

をもつぐらりていかなるべしそのぬき踊りをすくはんとして
中小學校の体操とすること）學校の体操所謂兵式体操を用ゐるは極めて不精成しより一國の設置する兵
式を一切とするもはなはだ世なるを知りて美術的運動をなさ
しむべし兵式体操も運動のなれば身の体操は其
味なきを以て生徒の精神を感ぜしめ其上に於て運動も
なり精神の発育もなる為踏を以て民間おい軍歌を歌ふ
より二層興味のあるとなり（為踏とは西洋の小(紙)
ぶんれど）よくなるべきは日本の小僧なれども運動おい
ちばん出だしたのは日本でい第一番なる仕事なれい

はいろくさいのはね方を採用するにもつぐ余は踊りをそなへに
丁度「宮さん〳〵」の歌を原歌わるおもく其調子の活潑
なるを中小學校の生徒に適すべしと思ふ（踊りは必ず
そ面白うないお話なり鏡なりおて踊るべし。それぞれ俗なる
ぶ蛙体操を用ゐる唾鉄、球杆、棍棒抜を利用すし西洋の
るべし蛙体操はもれば一人それのふるぎのとなれば
意化なく面白ないず（尤二人が二個の踊を拵てれふ者も有り）
はいろくさいとなるに二人が四個の太鼓をもつて行り或い
三人若しくは南端の二人が二個の太鼓を持ち中央の一人い三個
の太鼓を持ち踊り狂ふの際に西端の二人い自分の太

背と中央の者の大背とを併せたるなどあるなりなる証拠
し中小学の体操にうくるの如く世間よりしらべ…若し荒
べき事学校に行りて児童をおこなする学校ハ鄭重
便楽を交ふるハ国家の風と非なりなどいそぎたのみ
「さぶ大背の代りハ田大背を背ふ…あ五流なる著名をつけ
しめよ」の書とい皆老菓子となりめべし

○活力統計表オ三(本巻オ八十五頁八十六頁ヲ参看)

左の表前作五年前男中学校卒業者

身長　一六二九

指極　一六三一

上膊周　二五七　　左　二四八

下膊周　右　二五二　　二五五

胸囲　常時　八二

　　充盈　八五

　　空虚　七六

脚量　三三五リットル

体重　一三三二五

握力　右　三七キログラム　左　三一

筆仕せ附録

○竹村鍬氏詩文

左の一篇は氏十七八歳の時の作なり

山村観既望櫻

曾耳君王挂御車清香依舊一枝花炊烟時認山間里歓洞当年孝子家

左の詩面の書い宮余上京中左の絵つゝ送りたれ

寄宮内研山先生

世人抵掌談林泉渾付風流好話端至竟世味遂迂
没釣名営利何紛紛宮筍不喜庖双膝決策高臥大
砥山竹籬茅棟古湖地山紫水明映前楹酒量三薫
光減数詩才八斗白愈新嗟夫靈蔵可以瞑林下今
始得一人時是冬尾寒威凜満山白雪自妍妍想翁
対雪酌酒醉執筆佳詩連珠積成篇偶靈蔵詩云相逢尽道休官去
林下何曾見一人

又一首

黄香豊思之の説何ぞ安を吟置元ノ甚しきを(所ノ)
小子の五四日ヲ以テ昭ヲ期して言所見別者ヲ以テ
ヲ以て之を法ず小生の極たとなす所見別ヲ以て著法のめ
とせ一小生の極雖となす所見別者ヲ以てめとす
何ぞ人を絶倫すの才の長せるを小生をして之を論じて
五里霧中に彷徨せしめの会あるも後見之会する所無
知ず死れば見ざるを恐れ見ざるを恐れ天下誰の後世に責ん
只天下の思者僕ノ思ヲ知ざるを責む
五の一通ハ奇者ヲ以て中書ノ(ノ)

鍬拝啟子清足下春風和暢櫻花爛熳足下勉学之
餘暇二三快交寄輕後挾吟卷徜徉于濯陀之上不
堪神往魂飛祝示尊稿朗誦三復不能釈手篇ノ清

新秀麗風致可掬若擢肝瘁心而為者見則咄嗟稱
之此其天稟之才亦他人所不及也足下上京以後
學業大進非復前日之足下也是蓋由足下才識
絶人然使足下久在鄉里恐未易至此也夫東京天
下之大都也衢衢繁錯車馬絃繹灌洋碩儒對門並
戸四方人士雖集如雲自珍禽異獸至珠玉奇玩凡
可以驚目表心資於學者無一而不備而墨江故家
置其中楓葉櫻林夾岸而植風光明媚散賛慰懷之
趣不乏足下朝暮目覩而心諦以博其學以養其氣
又与嘉俊之士結盟納交講究利害匪懈故其學日

有所明月有所聰矣（墨）

下村こやありん

何時把臂話平生空看蠹容描帝清燈影連牀他日
梦雨声鏡屋此宵情腹藏万卷尤彰賬胸蓄寸氷轉
遠堂又識餘閑美風月吟肩聳去自峥嶸

子清詞宗鄙寄与松南兄對立写真一葉賦此道
謝　竹村　鍬拵

左の一通い金ぶの日光子の左斬子蔓の日中子事行り
芳筆拝読不堪神往魂馳憶大兄攘衣寒雲攀嶮岩
挑叢桂以望白雲於雲間激碎珠乎澗底雄篇大作

衛口而成筆不逞書而囊將溢集可謂快矣（墨）
左の詩は当年の窮の居を思ひ出て（一笑）物の中の世界より
書りしと

翻浪連空跡八千載將充筆賦归田劍看翠竹新公
苑却恥青衫旧少年書積床頭走蟹蟹画壁上起
雲烟柴閑尽日無朋訪古得人間小洞天
叙近況奉寄子清雅契次其所示瑤韻
松窗小史拝具

又

勤学欲君已則千鳳毫為朱紙為田挑燈談理常終
夜傾蓋訂交多忘年隈柳陰濃暗檐月沙舎声静冷
汀烟墨陀風色宜避暑之伏天如秋首矣
重疊前韻奉寄子規雅兄　松窓生

又

買酒何慳拙十千文園勤苦似耕田蹇才探韻清三
日懶性枕書過廿年竹屋詩情淡燈火石林禅味飄
茶烟且欲呼君話幽意其奈蒼茫遥海天　五疊韻
善鳴居士拝

又　時雪降る際

陰山頭壓

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ：第1-4編』　請求記号 WB12-18　ガラス使用

鄭氏古向帝王城豈可荒陂了一生晦似窮山許元
度心期題柱馬長卿閒花照鳥春三月水市烟村跡
酌徑遊躅不翅揮睛概要觀世体与人情

又一首

宮裡風花誰共親荒雞斷雁每傷神故人天外應思
我亦今宵夢故人

西條宮次樓

子規詞先聽此奉寄

松宮竹村翻

○諸氏の手跡

左の歌は文政十六年十月廿七日附

記今徵古漫相論已是無根豈有源迭化更疑其迭
化乾坤何啻此乾坤應知千載物皆滅誰道兩間人
獨尊手挈芳樽先一笑四顧天地盡陳迹

蟠谿坊梅室　狐神廟畔　鈴

加藤恒忠

渾沌子

國府東

左の一通は明治廿一年の夏在井八右衛門氏の臨梅山莊

本年お[illegible]年賀
[illegible]
長谷寺[illegible]
[illegible]

左の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

嗟天乎余乎終敗衂と忍成城下盟身論孤嶋気
未除怨怒来上仏京道如何天公不憐吾一戦又敗
又論嶋嗚呼古今英雄起如水白波滔々不可旋嗚
呼古今英雄亡如水一朝逝去怨無痕請見五十年
華夢化為孤嶋一片月

(男)小生病弱ナレ共性京向ヘ共者一ケ月位ヘ本復
覚束ナシ之ニ引換(菊池氏)早ヤ強ド本復の体ニテ
吉凶七日物京五十ニ物(書ヶ)オーヤオヤ羨シ為ヲレテ
無病の身ナラシメバ井林ニ体ッテ富士山ヘモ登ル事出ル七物(ヘシ)

迚ル事出ベキニ呈女(ヒ)ヒ注術句ヘ嗚呼何ナバ此身ハ
断リ迚ニ幸ナキヤ

如何ニ当地ハ吉大ニ弱ラザン病ニ成ヒ所ニテ加之ニ死の風光ヲ
以テ吉ラ知ル四月ニ成ル如チ鎮臺ヲ
捨テ来吉中朝のさしみ之その点ハ多り保ヲ無ル事
ハ山でナイガ十二万三千石ヲ有ル事ニ成ル七千八千九千ニ計リ
当地の食物ハ此辺ニ作ら山ヲの地なれバ第一の所得ヲ
ハ玉ヲ故余ヲ如き病身ハ後方なれば全病のもの
ナバ Mustard ヲ為スハ如しを上ニ去ラ金魚と云
ひ方ヲの(ヲ)計リ食ハシヤガルカラヨワッテシマウ

二百廿六

マダヨワツテシマラネバガ有ル夫レハ何ダト思ヒテ見レバ其
主等種ノ日御シ居ル様ニ見ヘル　吉松ハ早クヨレバ表ノ
ヨウニ云フ　之レハ物論トコワ〳〵作ウ投ゲ見レバ
男ノ方ハ油ノ分ハ油ノ中ニ共ニ浮ヲ横ヲ中ニ来
リ居ル　ヒ納メヤ時々ヨ多油ヲ入レカ差シ油メラバ請負
ヨ送ルベシ　ナンカトヤラカサレマシタカラ、ドーモヨワツテシマワ
タンジヤテイ　夫レテ仕方ガ無キ故又例ノ病気ニ托シ多ク油
メザル故　ケハ油ヲ市立揚ケ油置キ　ナイトヤツワ
ケメガドーモヨワツタゾイ
井林の竹抱ハドーモ制会キカンカイナ

然レハ何時帰リヤガツタカナー　久シリ俗音ヲ聞セシモ、生リ踊ル
ナルト云フニハアラネドモ油ナ故ツイ市ヲ出ル先ニ
ヤラ自宅ト共ニ御ヤ浸リ　姉ヶ崎の温泉ヲキマシタガ
御水ヲ飲ミ過ギ故是ハ是ガ痛メカノメカイナ　夫レハ
メツタノナニ面カレラン
終リ
小鬼工ハ市採煙ニ行キ
ヒル
法水相

キメナカロー

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

Hongo Morikawachō,
Tokyō.
the 18th July, 1887

My dear Masaoka;

I have had a ~~cl~~ crystalline form enough till late; yes a crystalline form, regular and hard. So I am much like Soda Crystal; but alas what change, when it loses the water of crystallization! I am thoroughly powdered down — so irregular as sleeping at any time like Nitrogen, smoking as Chlorhydric acid, and so soft that I cannot bear a usual business like the epistolary. Such irregularity and softening arose only in want of the water of crystallization. I think this Soda Crystal is too

easy to deliquesce, seeing that it lose the water of crystallization merely in the summer heat. I knew already what is the consequence of this deliquescence. My life is solitary and gloomy; I want N2O, the laughing gas. But to stop here my egotism.

You arrived home safe, but not at ease, I suppose. The wind blew hard and at night a storm passed over here. So your voyage was not easy, I am sorry to think so. I am glad and sorry to imagine how the faces of your dear mother and sister beam with joy at seeing so faithful and beloved son and brother. By the by, I said I am glad to think so; because it is so to you and me to be so. Again I said I am sorry; because

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18　ガラス使用

strong chemical affinity just as oxygen, combining with every body. Nothing seems to him to prove to be fluorine. — Perhaps Mr. Kikuchi doubts it to be identical with oxygen only on this point. Strange to seem, the person is an ingredient of your "Seven-queer-people".

* * * *

P.S. I thank you for your kindness to lend me the drawing-book; I copy them every day, but to no good. * * * *

I am Yours

I. Hosoi

I cannot enjoy more of this kind — the similar contrast as to blow cold and hot at the same breath. Here I beg your pardon; I have again strayed to egotism.

When you started here, I was still in bed fast asleep. In the afternoon on that day, I heard from Mr. Tender that his having bidden you your safe journey at the Shimbashi Station. * * * * A day before yesterday I went Mr Kikuchi; I thought he had already left here. * * * * * Recently he made a great discovery on chemistry; he found oxygen in pure state in solid form, constituting a human body of our grade. Surely he can boast of a Lavoisier or a Cavendish. The human body has a

なのなかいの所に世二年冬新理陣をよせる

（四）篇の篇の冠の書付上に「元」文字を記し極の理書を記し
東の方書付上に「元」文字を記し極の理書を記し
別紙を以て申上に「元」大九十七八の頃のうみに言語を
ミトへ細工の方を上へいだす金を結ひよい之
さしい鬼ちのさんるを入極に同くへつきて
さしに行くに上着に当世風の小紋紋三ツ付着い
きらきら二枚の袴下着帯に儒弥の丸帯上に紋付の
さられば左の方帯留に紋金の牡丹金具下結ん
上を結ひ結を長い所の方に長い長の中天地きちに

ちの事に成の如き極不安の故なるべし
四月二日

なのなかいの所に世二年の冬なりけん西条より極書
毛利氏及び金子氏より送りさされ候ものし

諸藩等今なほ奮發ニテ独立社ヲ結ビ民撰議院ヲ建ント
者ハ書ヲ通ジテ勤ニテ不文なる地方者ハ加入ニ成ル付テハ
此趣旨書ハ送附不致ニ付テハ情実ノ如奮発致ス
一層ヲ振ヒ不及ナカラ助力ヲ致ス事ニ而紙面書一枚ニ而
ハ付ケ難ク振ヒ此趣旨書ニハ前段韓愈ノ文ヲ引キ従テ不平
ノ起ル所以ヲ説キ次ニ新字解例及集字解例ノ其書ヲ得

サルヲ以テ其不平ノ基礎トナシ而シテ自由改進党ノ演説停止ヲ以テ其不平ノ徒ニ向ヒテ少カラザル刺戟ヲ与ヘシモノ拙者ノ論ニテハ氏ノ事ヲ挙ゲ必ズ目的ナカルヲカラズ又之ニ達スル手段ナカルヲカラズ目的ト手段トハ密着ノ関係ヲ有シ毫モ相離ルヲエズト想像セリ今諸君ノ言ハル所ノ事ハ一ノ目的ハ條例ノ不平ヨリ起リ先ヅ之ニテ其手段ハ新聞紙上ナランモノトハ拙者諸君ニ問ハン諸君ノ新聞ハ如何ナル勢力ヲ有スルヤ諸君ノ目的ヲ達シ得ルカ社会ノ輿論ヲ右右シ得ルカ諸君必ズ云ハン敢テ社会ノ輿論ヲ左右スルニアラズ又社会ノ文明ヲ進捗スルニアラズ唯彼此ノ思想ヲ交換シ之ヲ人ニ示シ又已ヲ慰ムルナリト然ラバ拙者又諸君ニ問ハン之ヲ数人ニ示シ以テ已レヲ慰ムルヨリハ寧ロ自由党或ハ改進党ノ新聞紙ニ投シ以テ社会之ヲ人民之衆ニ示サバ其目的ヲ達スル手段ニテ又已レヲ慰ムル一大機関ナリト諸君時ニ如何ニ答ヘンヤ

拙者ハ漸進主義ヲ持スル者ニ非ルナリ故ニ拙者ニシテ政治社会ノ地位ニ立ラバ必ズ改進主義ヲ主張セン如何セン身ハ学生ノ地位ニシテ政府ノ干渉ヲ受ケタリ故ニ政社或ハ政党ニ加入スルヲ得サルナリ假令政府ノ干渉ヲ受ケサルモ身ハ学生ノ間ハ眼ニ政社或ハ政党ナキモノナリ是以拙者因リテ自由権利ヲ受スルハトテ今諸君ト一政社ヲ結

ヒ一新誌ヲ発行スルモ其蓋シ甚タ少ニスルヲ信スルナリ夫レ
諸君及他者ハ皆普通教育ヲ受ケ者ナリ故ニ学問ノ新
説ヲ普ク了知識ヲ研究スルコトハ至当ニシテ甚タ益大ナラ
ンカ国家ノ興廃雑誌ノ如キハ其範囲広大ニシテ論説理学哲
学歌等ニ至ル迄其知識ヲ発達シ学術ノ進歩ヲ補助スル
甚タ莫大ナラン云々

十二月七日　義任拙

常規君
知之君
心之君

金子右衛門佐村安長（春）三並五氏と従ラ之ヲ五友と称
五友雑誌ヲ出ス者ヲ生ス（明治十五年氏ナラン）其氏歩ハ
叮嚀ナリヲ西京又ハ中郷名岩吉郎氏ト称シテ自
立雑誌ヲ出ス者ヲ発ス（此ニ明治十五年の事氏ニ勢ハ衰
シ衰ヘ雑誌モ衰ヘ）ヲ大金概ネ西京氏ヲ
一の活版雑誌ヲ出ダサレト金ヲ興ス為ニ迷ヒ西京氏ヲ
もの書ヲ其他拙ヲ　はの〳〵〳〵〳〵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治二十三年九月十五日本郷真砂町常盤会
寄宿舎にて書き終る　花ぬす人

明治三十三年九月十五日本郷真砂町常盤会
寄宿舎ニ於テ書ス　花如十人

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18
ガラス使用

国立国会
26.7.31
図書館

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ : 第1-4編』 請求記号 WB12-18

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『筆まかせ ： 第1-4編』 請求記号 WB12-18

ガラス使用